

「無縁社会」と「つながり」に関する 研究の成果と課題

日本大学 文理学部
非常勤講師 工藤 豪

1. はじめに

「無縁社会」という言葉が注目されたのは、2010年1月31日に、NHKスペシャル「無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃～」が放送されたことを契機としているように思われる。「無縁社会」とは、つながりのない社会、縁のない社会のことを意味し、「なぜ人々は、社会とのつながりを失っていき、無縁死していくのか」(NHKスペシャル取材班 2012)を追跡した報道であった。

ここで注目されるのは、高齢者だけでなく、30、40代の比較的若い世代が無縁社会に対して反響を寄せたことであろう(NHKスペシャル取材班 2012)。それは、若年世代の未婚者にとって、現在は親と同居していたとしても、将来“無縁”となる生活が容易に想像されたからではないだろうか。つまり、「他者との交流が乏しい人が一人暮らしをすれば、社会的に孤立するリスクも負う」(藤森 2010)のである。

このような状況と関連して、近年の日本社会において問題とされているのは単独世帯の増加であろう。国立社会保障・人口問題研究所が発表した「日本の世帯数の将来推計」(2013年1月推計)によれば、「単独」世帯は、2010年の32.4%から2035年には37.2%へ上昇すると推計されている。家族とともに暮らし、子や孫に看取られながら亡くなっていくというような、今まで当たり前だと考えられていた人生の終わり方が、誰にも訪れるとは言えなくなっているの

ある。

以上のような日本社会の状況を念頭におきながら、ここでは、「無縁社会」や「つながり」に関する研究動向について、単行本として刊行されている研究成果を紹介していくことにした。その際、個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究、社会的要因や対応策に焦点をあてた研究、特定の視点(宗教・消費)から接近した研究、調査・取材の結果をまとめた研究に分類して、整理を試みていくことにしたい。

2. 研究成果の概括

(1) 個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究

上野千鶴子は、シングルでも不安なく生きていくためのスキルについて、シングルとして生きた先達の体験談や知人の事例、事業などを紹介している。その中では、「おひとりさま」のメリットを強調した上で必要となるスキルを提示する、という議論の展開がみられる。例えば、一人であることも、誰かといることも、どちらも選べるのがおひとりさまの特権であるが、いつでも泣き言を聞いてくれ、困ったときに助けてくれる友人を抱えておくことはおひとりさまの心得であり、そのために努力やエネルギーを費やさなければならないという(上野 2007)。さらに、男性についても、定年後の生き方や要介護になったときの暮らし方について指南している。

中澤まゆみは、老後の経済的自立・精神

的自立・生活的自立・身体的自立に役立つスキルについて、友人・知人から回答を得たアンケートの結果と取材の成果を紹介している。その中では、「終活」という言葉をキーワードに、医療や介護を含めたツールを組み合わせながらオーダーメイドで作りあげていく「自分力」を蓄積しながら、老後と最期を準備していくための知恵と情報の備えについて議論を展開している（中澤 2011）。

川北義則は、自身の知識や研究者による見解、また、作家・医師など著名人の言葉やメッセージを手がかりとしながら、ひとり社会を生きていくためのヒントを提示している。

（2）宗教・消費という視点から接近した研究

島田裕己は、無縁社会における生のあり方や現代における生と死の問題について、「宗教」という視点から接近した。無縁社会が到来した背景や無縁社会における生き方について考察を行った結果、死に対する仏教の基本的な考え方からすれば、どのような形で死を迎えるかは必ずしも重要ではなく、また、人々が共同体に縛られない自由な暮らしを望んだ（無縁を希求してきた）以上、最期は無縁死に終わる人生なのであり、最期まで自立した生き方をまっとうするしかないと主張している（島田 2011）。

亀岡誠によれば、日本は「伝統的な絆」を主流とする社会から「近代的な絆」を主流とする社会へ変化し、今後は「ちょっとした絆」を主流とする社会へ変化していくという。その中で、「ちょっとした絆」の四つの具体例（隣人の絆・友人の絆・同好の絆・社会の絆）について、「消費」という視点から接近し、「ちょっとした絆」の必要性

が高いのは若者と高齢者であることを明らかにした（亀岡 2011）。

（3）社会的要因や対応策に焦点をあてた研究

藤森克彦は、急増している「単身世帯」の実態・要因・影響・対応策などについて、『国勢調査』やさまざまな統計資料を用いて分析している。単身世帯が増加した要因としては、高齢者人口の増加や老親との同居の減少、離別者の増加などを挙げているが、今後急増が予想される中高年男性においては未婚化の影響が大きいと指摘している（藤森 2010）。さらに、単身世帯の増加が社会に与える影響を貧困・介護・社会的孤立について検討し、また、単身世帯予備軍（親と同居する40歳以上の未婚者）の増加が男性に顕著であることを明らかにした（藤森 2010）。そして対応策としては、非正規労働者の待遇改善や地域コミュニティとのつながり強化を指摘するとともに、財源確保（増税と社会保険料の引き上げ）の必要性を主張している。

橋本俊詔は、血縁・地縁・社縁を大切にする有縁社会から無縁社会へと変化した背景、無縁社会における問題点や対応策などについて、国立社会保障・人口問題研究所や内閣府などによる全国規模の統計や意識調査を用いて分析している。その結果、個人主義の浸透により未婚率や離婚率の上昇、子との同居率減少が生じたことで若年・中高年単身者が増加し、それが貧困率の高い世帯の増加や不安感のある高齢者の増加、孤独死の増加につながっていると指摘している。そして対応策としては、基礎年金の全額を消費税で負担することや民生委員に福祉最前線の役割を担わせるなど、公共部門の充実を図るとともに、単身世帯への訪

問や高齢者の生活サポートなど、公共部門を補完する役割としてNPOの重要性を主張している(橋木 2011)。

石田光規は、「孤立」に潜む社会構造上の問題や日本社会における連帯の実情について、内閣府や国立社会保障・人口問題研究所などによる統計資料を用いて分析している。まず、家族・企業・地域という指標から人間関係を分析した結果、「家族」と「企業」については旧来的な関係への回帰(解放による恩恵は享受したいが、それに伴う不安は今までのシステムによって回避したい)の存在を指摘している(石田 2011)。そこで、今後の方向性としては、「家族」を中心とした連帯を活かしつつ、社会保障制度やコミュニティがそれを補完していくという方向性が妥当であるとしている(石田 2011)。

(4) 調査・取材の結果をまとめた研究

内閣府は、「国民生活選好度調査」の結果を用い、家族・地域・職場について、つながりの現状と変化、変化の要因・背景および影響、つながりの再構築に向けた方向性を明らかにした。まず、「家族」については、仕事や習い事による家族と過ごす時間の減少や別居志向により、家族のつながりが弱まっていることで、家族に期待される役割が十分に果たせなくなっていることを指摘し、家族と過ごす時間や機会を増やす取組などの必要性を論じている(内閣府 2007)。次に、「地域」については、深い近隣関係を望まない人や地域とのつながりが弱い層の増加によって、地域活動への参加頻度が低下するとともに、近隣関係のつながりが希薄化していることで、治安の悪化を感じる人も多くなっていることを指摘し、つながりの障壁を解消する取組や地域の機能を復

活させる取組の必要性を論じている(内閣府 2007)。そして、「職場」については、職場と個人との密着型につながりが弱まっていることで、人材育成機能の低下やコミュニケーション機会が減少していることを指摘し、個人生活とのバランスを図りつつ、職場内のコミュニケーション不足を補いながら仕事への満足度を向上させていくような取組の必要性を論じている(内閣府 2007)。

河合克義は、東京都港区と横浜市鶴見区で実施した、ひとり暮らし高齢者を対象としたアンケート調査の結果と2次調査(訪問面接調査)の結果を用い、大都市部の一人暮らし高齢者を対象に、「階層性」や「家族・親族・地域ネットワーク」という視点から社会的孤立問題を追究した。その結果、経済的に不安定な高齢層ほど孤立している者が多いが、その背景として、高齢期に至る前の時期の不安定な労働と生活、貧困が高齢期の孤立状態に大きな影響を与えていることが明らかになった(河合 2009)。さらに、孤立している人の中には、深刻な生活問題を抱えているにもかかわらず、介護サービスなどの制度を利用する姿勢がない人も多いため、そうした人々への支援・対応を行う職種を行政内部に設置することを検討すべきであると指摘している(河合 2009)。

NHKスペシャル取材班は、「無縁死」した人々や一人きりで生きる人々の人生を取材した記録を用い、「血縁・地縁・社縁」や「絆」が失われていった軌跡をたどることで、無縁死を引き起こしている社会の姿を浮き彫りにしようと試みた。その結果、無縁死のほとんどは身元が判明して家族がいるのに引き取られないケースであることや、家族より会社を優先して生きてきた人が離

別や死別によって家族とのつながりをなくし、さらに会社とのつながりを失ったときに無縁化する実態が明らかにされた。

3. 研究成果についての考察

(1) 無縁社会・単身世帯・孤立・絆・つながりを捉える視点や立場

ここまで、「無縁社会」や「つながり」に関する研究動向について、単行本として刊行されている研究成果を紹介してきた。これを踏まえて、三つの指標について整理を試みていくことにしたい。

第一に、無縁社会・単身世帯・孤立・絆・つながりを捉える視点や立場について、表1に示した。これをみると、「個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究」や「宗教という視点から接近した研究」においては、前向きな捉え方や楽観論の立場といえるのに対し、「社会的要因や対応策に焦点をあてた研究」や「調査・取材の結果をまとめた研究」においては、危機的な捉え方や悲観論の立場となっており、両者の対照性を把握することができよう。

表1 無縁社会・単身世帯・孤立・絆・つながりを捉える視点や立場について

指標	無縁社会・単身世帯・孤立・絆・つながりを捉える視点や立場
個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究	一人暮らしは「寂しい」とか「不自由」（とくに男性）などネガティブなメッセージは不要で、おひとりさまの老後は楽しめるのであり、そのための知恵と工夫は蓄積されている。 今の「ひとり」は昔の「ひとり」に比べて恵まれているので、「ひとり社会」をそう悲観することはなく、人それぞれがどう生きるかの選択肢が増えてくる。
宗教・消費という視点から接近した研究	人びとの“幸せ”感には「絆」が大きく関わっているようである。 無縁社会は全否定される社会のあり方ではなく、希望を抱くことも可能な社会であるし、また、「単身者」という存在を“孤独で寂しい”ではなく“自由で豊か”と捉える方がよい。
社会的要因や対応策に焦点をあてた研究	単身世帯の増加は、個人選択の結果で良いも悪いもないが、単身世帯は生活困難や貧困に陥るリスクが高いのに、現行の社会保障制度は単身世帯の抱えるリスクに十分な対応ができていない。 単身世帯が増えていることが問題というよりも、高齢単身者の多くが孤独感を抱いていることや、高齢単身者における貧困率の高いことが重要な問題である。
調査・取材の結果をまとめた研究	つながりが弱まると、精神的なやすらぎや充実感を得られなくなることや、つながりが生み出す価値を人々が得られなくなるという影響が懸念される。 誰にも頼らず一人で暮らす人から「迷惑をかけたくない」という言葉を何度も聞くが、“つながり”や“縁”というのは互いに迷惑をかけ合い、それを許し合うものではなかったか。

(2) 無縁や孤立および単身世帯となりやすい人、絆やつながりの弱い人

第二に、どのような人が無縁や孤立および単身世帯となりやすいのか、絆やつながりが弱いのか、について、表2に示した。これを見ると、「個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究」においては、自立して一人で生きるスキルを身につけられない人、老後に備えた準備や心構えをしていない人、「宗教・消費という視点から接近した研究」においては、若者、高齢者、団塊ジュニア世代、「社会的要因や対応策に焦点をあてた研究」においては、男性、高齢者、若年・中高年単身者、「調査・取材の結果をまとめ

た研究」においては、男性、未婚者、長時間労働者、高齢者、子どもなし、若年者、賃貸集合住宅居住者、パート・アルバイト、低所得層、会社優先の人などとなっている。

さらに、ここで注目したいのは「単身世帯予備軍」や「無縁死予備軍」という存在である。前者は、親と同居する40歳以上の未婚者を意味し、後者は、未婚・恋人なし・子どもなし・非正規雇用の人が想定されていた。しかるに、未婚化の進展、異性の交際相手なしという者が過半数近くを占める現状、非正規雇用の増加、このような日本社会の状況を鑑みると、今後より一層重要な問題となってくるのではないだろうか。

表2 無縁や孤立および単身世帯となりやすい人、絆やつながりの弱い人について

指標	どのような人が無縁や孤立および単身世帯となりやすく、絆やつながりが弱いのか？
個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究	ひとりで生きるスキルを身につけられないシングルの女性や、妻への依存が強く、妻に看とってもらえると思っている男性。 自立のスキルを身につけられないシングルの男性や、老後と最期を準備していくための知恵と情報を備えていないシングルの人。
宗教・消費という視点から接近した研究	ちょっとした絆の危機にある（より必要とする）のは（単身者の多い）若者と高齢者。 村社会のしがらみから逃れて都市へ移住してきた世代の子ども世代（村社会における有縁の原理を知らない団塊ジュニア世代）。
社会的要因や対応策に焦点をあてた研究	単身世帯予備軍（親と同居する40歳以上の未婚者）は女性より男性に多い。未婚や離婚、また子どもとの別居によって単身世帯で生活する若年・中高年単身者。 孤立（主観的・情緒的な孤立）に陥りやすい人たちは、高齢者・男性・町村部居住者に多い。
調査・取材の結果をまとめた研究	同居家族とつながりが弱いのは男性・独身者・長時間労働者、別居家族とつながりが弱いのは男性・高齢者・子どもなし・遠距離居住者、地域活動への参加度が低い人は若年者・無配偶・子どもなし・雇用者・賃貸集合住宅居住者、職場で人とのつながりが弱いのはパート・アルバイトに多い。緊急時に支援がない者は低所得層に、正月を一人で過ごした者は男性の前期高齢者層に多い。 孤立状態や無縁に陥る危険性が高いのは、未婚の男性や会社優先の人たちである。 「無縁死予備軍」は、未婚・恋人なし・子どもなし・非正規雇用の人である。

(3) 無縁社会の到来や単身世帯の増加、絆やつながりの弱まりについての対応策

第三に、無縁社会の到来や単身世帯の増加、絆やつながりの弱まりについての心構えや対応策について、表3に示した。これをみると、第一の指標において、「個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究」や「宗教という視点から接近した研究」では前向きな捉え方や楽観論の立場が示されていた

が、ここでは、その前提となるような心構えや必要となる準備について言及されている。一方、「社会的要因や対応策に焦点をあてた研究」や「調査・取材の結果をまとめた研究」では危機的な捉え方や悲観論の立場が示されていたが、ここでは、その危機的状況を解決するための政策や対応策が提案されている。また、第二の指標において挙げられていた人への支援・対応という要素も含んでいるといえよう。

表3 無縁社会の到来や単身世帯の増加、絆やつながりの弱まりについての対応策

指標	無縁社会の到来や単身世帯の増加、絆やつながりの弱まりについての心構えや対応策
個人レベルの意識や対応に焦点をあてた研究	必要なのは、友人を抱えておく努力やプロの介護を受け入れるマナーやノウハウであり、また、会社と家族以外の人間関係や居場所を定年前からつくっておくことが大切である。 在宅医療や介護保険、社会福祉協議会やNPOの福祉サービスなどを利用して、24時間生活を見守るシステムをつくりあげるとともに、遺言を確実に言い、必要なら成年後見制度を活用する。
宗教・消費という視点から接近した研究	無縁死・孤独死の予備軍である「おひとりさま」が増えているが、高齢化が進み、財政状況も悪い中では予算を使い対応するのは難しいし、人々が共同体に縛られない自由な暮らしを望んだ以上、最期は無縁死に終わる人生なのであり、最期まで自立した生き方をまっとうするしかない。
社会的要因や対応策に焦点をあてた研究	非正規労働者の待遇改善や地域コミュニティのつながり強化、および財源確保が必要となる。 公共部門の充実を図るとともに、公共部門を補完する役割としてNPOの重要性が高まる。 「家族」を中心とした連帯を活かしつつ、社会保障制度やコミュニティがそれを補完していく。
調査・取材の結果をまとめた研究	孤立した人々への支援・対応を行う職種を行政内部に設置すること。 つながりを再構築するために必要なのは、時間的制約をなくすことや、つながりの場を十分に提供すること、そして、家族・地域・職場が現状に即したつながりを構築するための工夫をすること。

4. おわりに

以上、「無縁社会」や「つながり」に関する研究動向について、単行本として刊行されている研究成果を紹介するとともに、三つの指標から考察を試み、研究成果から得

られた知見を整理してきた。この知見を踏まえて、今後の研究を展望するとき、少子化対策（子育て支援施策）に関する研究動向が参考になるのではないと思われる。

守泉によれば、日本の少子化対策には三

つの柱が存在し、「ワーク・ライフ・バランスの推進」は“政府”が担うとともに“企業”の理解と協力が不可欠であること、「保育サービスの拡充」にあたっては“地方自治体”が地域の事情に合わせてきめ細かく展開していくこと、「経済的支援」は“国”レベルで議論すべき問題であることを指摘している(守泉 2011)。「無縁社会」や「つながり」に関する研究においても、重要かつ喫緊の課題について認識し、さらに個人、家族、地域、職場、自治体、国が、それぞれ果たすべき役割を明確にすべきであろう。

今後の課題としては、多様な視点から行われている研究を包括する議論を展開した上で、取り組むべき課題を明示するとともに、その課題を誰が担うべきなのかを考究していくことが求められているのではないだろうか。

【参考文献】

- 石田光規, 孤立の社会学——無縁社会の処方箋, 2011, 勁草書房
- 上野千鶴子, おひとりさまの老後, 2007, 法研
- 上野千鶴子, 男おひとりさま道, 2009, 法研
- NHKスペシャル取材班, 無縁社会, 2012 文春文庫
- 亀岡誠, 現代日本人の絆—「ちょっとしたつながり」の消費社会論, 2011, 日本経済新聞出版社
- 河合克義, 大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立, 2009, 法律文化社
- 川北義則, ひとりの品格, 2011, 青萌堂
- 島田裕己, 人はひとりで死ぬ——「無縁社会を生きるために」, 2011, NHK出版
- 橘木俊詔, 無縁社会の正体——血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか, 2011, PHP研究所
- 内閣府, 平成 19 年版 国民生活白書——つながりが築く豊かな国民生活, 2007, 時事画報社
- 中澤まゆみ, 男おひとりさま術, 2010, 法研
- 中澤まゆみ, おひとりさまの終活——自分らしい老後と最後の準備, 2011, 三省堂
- 藤森克彦, 単身急増社会の衝撃, 2010, 日本経

済新聞

守泉理恵, 日本における少子化対策の展開: 1990～2011年(高橋重郷『家族・労働政策等の少子化対策が結婚・出生に及ぼす効果に関する総合的研究』所収), 2011

筆者プロフィール

工藤 豪 (くどう たけし)

1977 年生まれ。2011 年日本大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士(社会学)。専門社会調査士。日本大学文理学部若手特別研究員を経て、現在、日本大学文理学部、埼玉学園大学人間学部ほか講師。専攻は、家族社会学、人口社会学。

